

ブラックバス密放流問題と駆除

有村 浩一

千葉県

昨年6月初旬より活動メンバー10名～15名体制で印旛沼・雄蛇ヶ池・霞ヶ浦（北浦）にてブラックバス及び、ブルーギルの密放流禁止をバスアングラ対象にチラシを配布した。同活動時において水辺の動植物保護の為清掃を実施し、釣り糸針その他空缶などゴミ類の清掃を行った。

関東地域においてメダカ・ヤマメ・イワナ・ワカサギ等の在来魚種の危機的状況に拍車がかかっているため、アングラを中心に啓蒙活動を行った。

8月初旬、児童生徒の夏休みを利用し千葉市花見川区花見川の団地集会場において、講習会を開き入場者数60名を越す参加人員にて「内水面の環境破壊」という演題において、有村浩一他2名が1時間半に渡り講演した。この中での質疑応答が盛り上がり、具体的なブラックバス・ブルーギルの駆除方法が討論された。有村論におけるキャッチアンドイト（釣ったら食べよう）も良いが、それよりバスアングラの協力が欠かせない、との意見が多く現在のキャッチアンドリリースの是正が急務ではないかとの意見が多数あり、アングラを巻き込んで駆除の方針を決めた。水面より魚を引き上げた場合、八郎潟にて推奨されている方法（すなわちブラックバスはリリース禁止）で方向性が定まった。

8月中旬、毎年実施している小・中学生を中心とした「環境ふれあいキャンプ」にて野外講演を行なった。人員は学生主体の50余名で、千葉県大多喜町養老川の清掃作業を実施、またオリエンテeringの中で、特に水辺の環境保全に対する班別発表を行なった。（写真参照）

講演会・野外講習等は年間を通じ7度ほど実施

したが、有村グループにおける実施要件は3回である。土日を利用し有村グループのメンバーが関東各地においてブラックバス問題の啓蒙活動を展開しているのは、ここには列記しない。不定期ではあるが有村グループのメンバー集会における各個人提出のレポートを列記したい。この活動は生物多様性また環境保全の重要な問題点であると現在でも痛感している。特に内面水における環境破壊は見えづらいため、その重要性ははかり知れない。ここ数年間の活動状況は専門分野におけるアドバイスが多数ある。

琵琶湖博物館・主任学芸員の中井克樹氏、全内魚連の佐藤稔氏や山梨県水産技術センターの大浜秀規氏などにアドバイスを受け、有村グループは微力ながら環境保全に取り組んでいる。秋月岩魚氏の講演会に参加し聴講させていただいている。昨年6月より本年2月末日までの有村グループのメンバーと代表の有村による活動状況と成果を以下に記す。

近年、マスコミにてブラックバス問題が特に取り沙汰されるようになり、私たちの身の回りにある問題としてクローズアップされてきた住環境のなか、例えば団地の池や田圃の溜め池にブラックバスやブルーギルが密放流され、その他の生態系が破壊されている。ここで一つ考えねばならぬことは、楽しむために釣りをしているアングラに責任の全てを押しつけるのは危険なことである。すなわち、密放流と釣り人はほぼイコールで結ばれないからである。一部不見識な者によってもたらされた弊害がバスアングラの身にも起こっているのだ。キャッチアンドリリースを考えた場合、

生命の尊重・生物の多様性を広め教えることにつながる。親子で釣りをしている場合、釣り上げた魚を殺し捨て去る行為を子供は見る事になる。(それが必要なのだが) 子供心に生命尊重という教育的理念・概念をここできちんと説明できる親子は極端に少ないであろう。それよりも、釣った魚を水中に戻す行為に生物・生命の大切さを教えるほうが実際よくわかる。まして、釣具業関係者に推奨されていることはキャッチアンドリリースであり、水や地球の保全を唱える。ブラックバスやブルーギルを対象魚としたアングラーは小魚全てをベートフィッシュと片付けているが、基本的にベートフィッシュなるものは存在しない。レッドデータブックによると国内どこにでもいるはずのメダカが載っている。たしかに農薬による土壌・水質汚染が深刻ではあるが、しかしベートフィッシュという言葉で外来魚種が小魚たちをレッドデータブックに追い込んでいるのも現実である。

以上のような事を考えていくと、結局物事を大きくとらえてもらいたいと思うのは、要はバスのこと。あるいはバス釣りのことではなくてバス釣りをしたい人間もやはり水辺環境を考えようとか、自然を守ろうと言っているが、ここでいうところの環境とはなんなのか、自然とはなんなのか、なにを守らなければならないのかというあたりをもう少し考えてもらわなければいけない。また、バス釣り人たちが守りたいものを自分たちが何を守ろうとしたのかということをよく考えてそれがいわゆる社会全体の動きとどう合ってどう違っていてどれが受け入れられない部分なのかということまで考えていけば答えは簡単に出るはずである。

今少なくとも国際的な流れとしては、まず生物多様性という言葉がかなり広く認知されるようになってきているが、生物多様性という言葉が結局どういう形で使われているかということ、その生物の多様性はもとある形のままでできるかぎり守っ

ていかなければという立場なのである。すなわち、多ければいい、種類を入れて増やせばいいという話ではなく、その生物の多様性をもともとあった姿でできるかぎり守っていこう、くずれたものはもとは戻していこう、それをくずす外敵をできるかぎり排除していこうということである。

それでいくと、ブラックバスやブルーギルなどは、あきらかに筆頭に上がってしまうわけなのである。

有村グループのメンバーによる話し合いやレポート資料を紹介すると、中心的な文脈は以上である。

本年度、活動はすでに開始しており、春の産卵時に水深1メートル以内の岸辺を少し大きめの熊手で掃除という名目で産卵床を壊している。5月ごろまで逐次ボート等を借りて行なっている。あまり人員は集まらないが、これからも実施していくつもりである。また、私たちの活動により話が聞きたいという方もできたので随時説明や講義をしている。(例:千葉県大原町にて実施されたヘラ鮎釣り場は当初漁連も絡み有料にて営業を開始したが、密放流により閉鎖にまで追い込まれた。この当時の事を覚えている方の問い合わせ等にて説明に行く)

毎年夏季に実施している「環境ふれあいキャンプ」は本年もまた実施予定で、千葉県以外東京・神奈川からも参加予定がある。

昨年より、有村浩一が調査・検討をしながら外来魚問題の著述について、山梨県の水産関係者のアドバイスで小中学校生徒向けの本にまとめる活動を現在も行なっている。

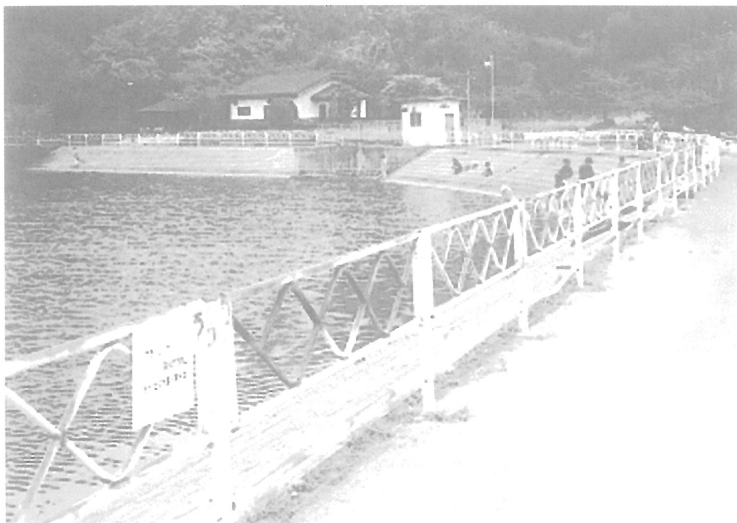
以上、一連の活動を通し、全国の水産課・水産振興課・農政部流通園芸課・生産振興課等の内水面に携わる方々から各種資料を頂戴しており、以下、参考までに列記させていただきます。

新潟県水産部水産課 本間様

青森県水産振興課	鹿内様
群馬県流通園芸課	柳澤様
秋田県水産漁港課	斎藤様
宮城県漁業調整班	班長様
茨城県漁政課	富永様
栃木県生産振興課	市川様
埼玉県農芸畜産課	山口様
長野県園芸特産課水産係	築坂様
岐阜県商工部水産課	斉藤様
滋賀県水産課	藤沢様
京都府水産課	近藤様
和歌山県水産課	丸山様
山口県漁政課漁業調整取締班	魚津様

以上の方々には貴重な資料を提供して頂き、今後の活動に生かしていく所存です。

以上



2001年 5月

千葉県雄蛇ヶ池にて

密放流の看板設置

以下2枚についても同様





2001年5月

千葉県印旛沼にて

密放流の看板設置

以下1枚についても同様



2001年9月

千葉県印旛沼にて

釣り人にアンケートの実施

釣った場合にリリースせずに持って帰るよう訴えてみるが反応は芳しくない



2001年 8月

千葉県大多喜養老溪谷にて

生態系破壊をテーマに合宿を開催と、
ともに水辺の調査とゴミ拾いを実施

以下 2 枚も同様

